

呉錦堂を語る会通信

NO.26 Apr. 2016

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋 雄三 方「呉錦堂を語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「呉錦堂を語る会通信」編集委員

発行日 2016.4.1



1910年外務省文書に登場する呉錦堂の商号「義生」

呉錦堂が使用した商号として、「怡生」、「義生」及び「義生栄」の3つがよく知られています。この内、「怡生」については、既に、第23号でかなり詳しく取り上げました。本第26号では、「義生」と「義生栄」について、外務省文書ほかを典拠とし、具体的にみていきます。

まず、明治43年12月14日付、在南京領事井原真澄の外務大臣伯爵小村壽太郎宛、鎮江ニ於テ義生燐寸製造工場ノ開設ニ關スル計画と題された文書を取り上げます。呉錦堂の中国での事業を考える上で貴重な文書で、孫文記念館にも展示されております。ここでは、アジア歴史資料センターのWeb siteからダウンロードしたデータを使用いたしました。(編集委員 橋 雄三)



機密第二五號

明治四十三年十二月十四日

在南京

領事

井原真澄

外務大臣伯爵小村壽太郎殿

鎮江ニ於テ義生燐寸製造工場ノ開設ニ關スル計画

當館管内ナル鎮江ハ揚子江岸ニ於ケル日本燐寸ノ重要輸入港ニシテ本邦ヨリ清國ニ輸入スル燐寸ノ約七分ノ一ハ同港ニ吸収サル、ノ有様ナルガ別紙訳文ノ通り浙江諮議局參議院吳作鎮ハ同地金山河下ニ義生燐寸製造工場ヲ創設セントシ製造燐寸ニ関シ特權ヲ得ンヲ勸業公所ヲ經テ農工商部ニ稟請致候
然ルニ吳作鎮ト稱スルハ呉錦堂ノ本名ニシテ明治三十七年中日本二帰

化シタル清國人ナリト記憶致居候若シ記憶ノ通り帰化人ナルトキハ同人ハ日清兩國ニ国籍ヲ有シ本邦内ニ於テハ日本人トシテ二三ノ燐寸工場ノミナラス多クノ不動産を所有シテ帝国臣民ト同一ノ保護ト利益トヲ享有シ又タ一面自己ニ利益アル場合ニハ清國に帰ッテ清國人トシテ事業ヲ經營シ居ル者ト被見受候而シテ若シ彼ガ計画ノ如ク同工場製造燐寸ニ對シ預期ノ特權ヲ與ヘラル、場合ハ将来揚子江筋ニ於ケル我燐寸輸入ニ鮮ナ一昨年上海蘇州鎮江南京ノ四港ニ輸入セラレタル燐寸純輸入額ノミヲ見ルニ

南京	一五五、九八九	三六、八五七
鎮江	一、四二四、一三〇	五二三、四〇一
上海	一、七四六、三七〇	三七二、三五七
蘇州	二〇、〇八四	三、九〇八
合計		九三六、五二三

ニシテ本邦燐寸製造者ニ於テハ大ニ注意スヘキ事柄ナラント被存候
尚ホ帝國政府ニ於テモ自己ノ都合上私利ヲ營ム為メ其國籍ヲ二三ニスル人物ヲ帝國臣民トシテ御保護相成候事如何ノ者ニ候ヤ為御參考別紙吳ノ願書譯送ニ及候間御査閱相成度候敬具

(左は、先頭に挙げた複写文書の続きです。)

南京	一五五、九八九	三六、八五七
鎮江	一、四二四、一三〇	五二三、四〇一
上海	一、七四六、三七〇	三七二、三五七
蘇州	二〇、〇八四	三、九〇八
合計		九三六、五二三

中村哲夫著「呉錦堂 寧波幫の主導した実業愛国の革命」に見る「養生」及び「養生栄」

2004年発行、神戸華僑華人研究会編『神戸と華僑 この150年の歩み』に中村哲夫執筆「呉錦堂 寧波幫の主導した実業愛国の革命」(以下、「呉錦堂」と略記)が掲載されています。「呉錦堂」では、商号、股、同業組合の関係がわかりやすく記述されていますので、ここに引用させていただきました。

《1. 「呉錦堂」よりの引用》

当時の日本の社会文化を代表する総合雑誌である『日本及日本人』(第457号、明治40年4月15日刊)は、「清商呉錦堂」と題する記事を載せる。

「幼にして家貧しく、稍々長じて上海に適き、袁子莊に養はる。後ち養生栄、泰昌東の二人と相謀り、雑貨店を日本に開かんとし、本店を上海に置き、支店を大阪に設け、呉は来たりて支店の商務を管掌す。業を営むこと七年、贏得十五万金、茲に於いて共同の約を解き、各自単独に営業せんとし、呉は其の分配として三万金を懐にするや、乃ち去って神戸に行き、怡生号を創立、盛んに綿花の輸入を図り、傍ら各種の事業を営み、商略着々図に中りて、勢力、大いに清商の間に張る。(以下略)」

この記事の筆者は、梅皋生とあるのみ。残念なことにこの筆者には、中国商業界の基礎的な知識が欠けていた。そこに「養生栄」、「泰昌東」とあるのは、実は人名ではない。

養生栄や泰昌東とあるのは、共同の出資者たちによる商号の名称である。たとえば、最初に10人が日本でいう株にあたる「股」をそれぞれ平等に出資し、養生号が設立されるとする。そこに共同経営を希望する人物が、三股にあたる出資金をだすと、新たに名称を変更し、養生から養生栄というように名称と経営規模が変化する。このような増資もあれば、逆に、減資もある。養生栄から栄の股に相当する出資者が抜けると、ふたたび養生の名が復活することになる。(中略)

呉錦堂の場合は、上海でのセメント、マッチなどの営業には「養生号」の名称を使用している。上海で起業した当初から「養生」の股を保有していたようである。それを増資した養生栄から、栄の字に相当する股の持主が分離し独自資本となり、養生号と改称したものと思われる。「養生」は寧波商人団の日本貿易を専業とするグループの登記メンバーとみてよい。われわれは、出資者が「股」という資本金を出せば、自由に商号を設立、改廃できるように思い込みがちであるけれども、おのおのの商号は、同業組合を構成する法的な会員資格でもある。だから、

上海において日本との貿易に関係する同業組合である「幫」という組織の協議をえて、その合意のもとに改廃されるのが「養生」などの商号なのである。

《2. 「呉錦堂」からわかること》

ところで、上掲「呉錦堂」から、一部、執筆者の推察も含まれるが、次の4つのことがわかる。①呉錦堂は上海でのセメント、マッチなどの営業に、その共同出資者となり、「養生」の商号を使用していた。②出資者が増え、商号は一時、「養生栄」となった。③「栄」の部分の出資者が独立し、商号はもとの「養生」にもどった。④呉錦堂は寧波商人団の日本貿易を専業とするグループの一員であった。

《3. 今一度、中華会館建設の寄付を見てみる》

当通信第23号で、関帝廟の庭に立つ、「創修中華会館記」と「謹將神戸各捐金芳名開列」、二つの碑(右下の写真)に言及しました。後者は、1893年1月に竣工した神阪中華会館建設に際しての寄付者、あるいは団体の一覧です。この碑文中、寄付300円の並びに「養生栄」があります。

ところで、上掲「呉錦堂」の「養生栄や泰昌東とあるのは、共同の出資者たちによる商号の名称である」という記述からすると、「養生栄」の寄付300円は、呉錦堂個人の寄付とはいき切れなくなります。事実はどうだったのでしょうか。



《4. 「養生」の名が入ったマッチラベル》



これらラベルはマッチ箱の両面
(画像はいずれも、孫文記念館の展示より転載。
原資料は(社)日本燐寸工業会所蔵。)

獅子文六『バナナ』に描かれた呉錦堂と移情閣

移情閣の門前に獅子文六の『バナナ』の一節、「海が、展がってきた。…(番人の婆さんが)愛想よく、もてなしてくれた」を刻んだ碑が立っています。『バナナ』は1959年の作品です。この作品の内容を紹介いたします。ここでは、登場人物が呉錦堂について語る部分と、主人公の青年らが移情閣を訪れる場面を取り上げました。文章は、獅子文六『バナナ』普及版(1961年 中央公論社発行の初版本)より引用しました。なお、引用については、著作権を相続されているご長男、岩田敦夫氏の承諾を得ております。(編集委員 橘 雄三)

《あらすじ》

日本で成功し、優雅に暮らす華僑家族を中心に、若者達の夢と挫折を描いた都会派ユーモア作品。おもな登場人物は、台湾出身の呉天童・天源兄弟、天童の子・龍馬とその女友達サキ、天源の娘・淑芳ら。呉天童は東京の盛り場の土地売買で財を成し、大きな屋敷で優雅に暮らしている。家業の貿易業は弟・天源が継ぎ、神戸を拠点に事業を行っている。天源は、自分たちの祖先として、呉錦堂を敬慕する。題名の『バナナ』は、ストーリーに度々出てくるバナナの輸入に由来する。

《天源、呉錦堂を語る》

「それア、叔父さんは、商業の天才だそうだから…」
 「わたしが、商売ウマイのやったら、オマイかて、ウマイはずや。オマイは、わたしの甥やないか」
 「でも、うちのオヤジの子ですからね。オヤジときたら、消費専門家ですよ」
 「いや、兄さんかて、一生一度、大儲けしたことあるんや、わたし等の家は、呉錦堂と同じ姓やぜ」
 「誰ですか、呉錦堂って？」
 「天源は、嘆声を洩らしたが、やがて、思い返して、
 「オマイ、知らんのも、ムリないよ。東京の華僑でも、この偉い人の名知らん奴、多

いよ。日本へきた中国人で、こんな金儲けた人いない。今の日本の華僑、全部合せたよりも、もっと、もっと、大きな商売して、沢山のお金儲けた…」(中略)

呉錦堂は、明治十八年に、貧しいデッキ・パッセンジャーとして、小さなシナ靴一つ持って、大阪川口に下船した。川口で郷里の先輩が南京雑貨屋をしていたので、そこへ身を寄せ、店の品物の扇子や筆墨、南京白粉のようなものを入れたシナ靴を担いで、大阪市内の行商を始めた。

必死の勤儉貯蓄で、数年後に、やっと小金ができたが、誰でもやるシナ料理店や理髪店には、手を出さなかった。

彼は、神戸の海岸通りの近くに、小さな店を設けた。極めて、貧弱ながら、貿易商として、立つことにしたのである。神戸の特産のマツチや安雑貨を、上海方面に輸出して儲けた金で、郷里の寧波から、菜花油、大豆油を仕入れて、阪神の商人に売った。

やがて、彼は、ボロ船ながら、紅葉丸という汽船を買ったところまで、漕ぎつけた。安い運賃で、自分の商品を運ぶのみならず、自分で乗船して、母国の生産地で日本人の嗜好を説明し、また、日本へ帰ると、取引先に、生産地の状況を知らせるといふ働き振りだった。また、両国の相場の動きも、そうすることに、早く察知できるように、投機的な商いも、人に先んじた。

これが、彼の成功の第一歩だった。「錦堂の最初の店、今の隆新公司のところだったらしい。それだけでも、わたしに随縁ある…。そして、錦堂とオマイの父さん、

同じこととして、金儲けた…」

天源は、呉錦堂が神戸港の将来に眼をつけ、

タダのようになにか安かっ

た土地や家屋を買い入れて、大きな富の基礎をつくったことを語った。天童が、戦後に、東京の盛り場の土地を買い込んだのは、彼の一生一度の金儲けだったが、呉錦堂の方は、単に神戸市内のみならず、須磨、舞子、明石の郊外に手を伸ばし、県史に残るような大規模の土地開墾までやってのけた。

彼は、遂に、関西財閥の一人にのしあがり、セメントや紡績の大実業家になった。明治天皇から銀盃や藍綬褒章を貰ったのも、日本の富豪並みであるが、東京の株成金鈴久を対手にして、鐘紡株の大決戦をやった時は、日本人の実業家に真似のできぬ大胆さとネバリを見せた。神戸に呉錦堂ありということが、日本中に知れ渡ったのである。呉錦堂は大正十四年に六十八歳で死んだが、その栄華の跡は、今だに、神戸附近に残っている。呉錦堂旧居跡というのが、須磨にも舞子にも見出される。(4頁へ続く)



右手前が『バナナ』の碑

獅子文六『バナナ』に描かれた呉錦堂と移情閣（3頁から続く）

（3頁から続く）

「でも、叔父さんは、そんな昔のこと、よく知ってるんですね」（中略）

「呉錦堂さん、親類やからな」

「へえ、うちの親類なんですか」

「わしは、そう信じとる。錦堂さん、浙江省寧波の人やが、わし等の家も、もともと台湾本島人やないのや。お父さん、台湾で金儲けするつもりで、広州からきて、台湾人になったんや。そして、お父さんのお父さん、浙江省で生れたのよ。オマイ、中国のこと知らんが、わし等の国では、同姓の人、皆、親類と思うとるのや」

《龍馬とサキは淑芳の案内で移情閣を訪れる》

海が、展がってきた。淡路島が、正面に浮かんでいた。そして、舞子の松が、すっかり公園化されたサクの中に、衰残の姿を見せていた。

「あれや、移情閣……」

淑芳の指さす行手に、海沿いの国道の左端を、ただ一軒の建物が、西洋の城の円塔のように、空を刺していた。

建物の正面は、錠まえがかかっているの、横の通用門から入ると、廢墟のような石造洋館から、番人の婆さんが出てきた。天源から、電話があったとあって、愛想よく、もてなしてくれた。呉錦堂の子孫が振わないので、この移情閣も、今は神戸華僑青年会の手に移り、夏は会員が水泳にくるが、常時は、番人夫婦が住んでるだけということだった。

「こないに、荒れ果ててしまいました。昔の見事さいいましたら、まるで竜宮のようで……わたしは、その頃、ここで女中奉公しとりましたので……」（中略）

「あら、あの天井……」

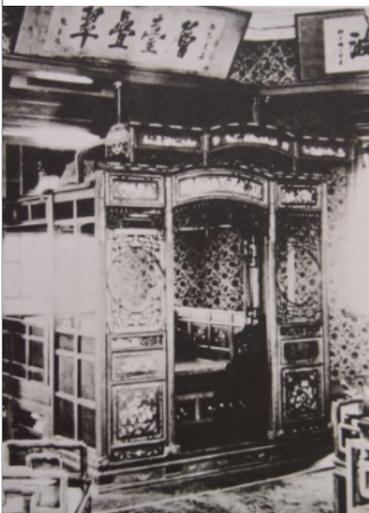
サキ子が、叫んだ。

菱形の高い格天井であるが、シャンデリアが垂れ下がってるその中心部は、金色と龍と牡丹との純中国風な彩色浮彫りになっていた。それは、恐らく、呉錦堂が建築家の意志に逆らって、自分の好みを強制したのだろうが、俗悪の上もなかった。しかし、その俗悪さが、公衆浴場の風景画とちがって、重厚味と圧力を備えているのは、細工が入念なためばかりではなかった。「あの牡丹の花のまわりのサンゴは、みんなホンモノでございますし、龍の上に張った金もホンマの金で、金バクの目方が一貫目以上と、聞いたります。それが、一階、二階と同じところに、二か所ございまして……」

婆さんは、そんな貴重なものがあるので、この廢屋の管理に、骨が折れることを、述懐した。やがて、一同は、二階へ上ったが、そこも、階下と同型同風の装飾であり、恐らく、階下をサロンに、二階を食堂に用いたのではないかと、思われた。家具も、中国風を加味した彫刻が、必ず施され、イスやテーブルも、かえって使い心地が悪そうな、高価な硬木ばかりだった。

三階は、寝室に用いたものか、室内装飾も、

『バナナ』の碑は、2000年4月、移情閣の復原開館時に神戸舞子北ライオンズクラブが寄贈



昭和三十年代後半に撮影された移情閣3階の天蓋付寝台（2001年、兵庫県発行『移情閣移築修理工事報告書』より）

和らぎが見えるが、北側に据えられた中国風寝台が、人々を驚かせた。それは、ベッドというよりも、天井のついた一つの部屋であり、入口の両側は、例によって、すかし彫りや象眼の花鳥で飾られ、寝具を置く場所も、蒔絵の大きな弁当箱のような側面も、柱も、天井も、装飾化されない部分は、一つもなかった。現在は、まったく使用されないの、寝具類は影もないが、一番下の個所には、精巧な籐のアミが、張ってあった。一見、他に似合わぬ簡素振りだが、それは、スプリングの用をなすものと、推察された。そして、その広さは、ダブル・ベッドを二つ繋ぎ合せたより、もっと余裕があり、どんな大男でも、一人寝は寂しかりうと、思わせるほどだった。今は埃のつもっているこの寝台に、曾ては、どんな豪華な寝具が飾られ、どんな人が寝たのであろうか。楊貴妃が用いた翠帳紅圍とは、これでなかったのか！。